

文樂叢書

三十三所
花の山

壺坂觀音靈驗記



1

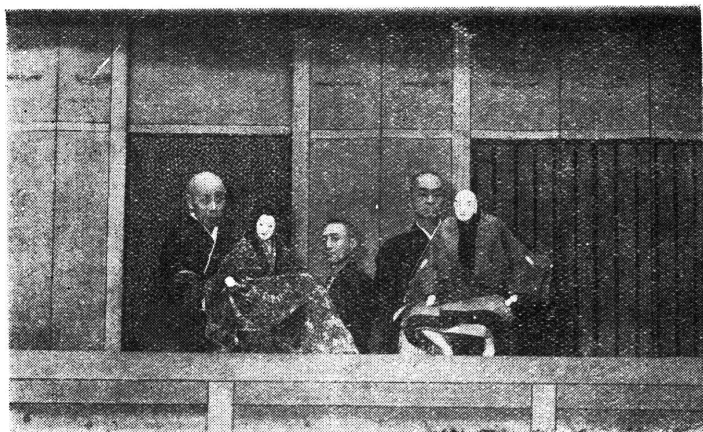
床解考
人形の
型證說本

文樂愛好會編集

舞台寫真二題



昔 お里 初代榮三・澤市 三代玉藏



今 お里 吉田文五郎・澤市 桐竹政亀

趣 旨 書

手頃な床本がほしい。文樂鑑賞の前に豫備知識として目を通して置くような、又ラデオの文樂の時間に、手許に開いて見ながら開けるような適當なテキストが欲しいと云う方々が随分多いのではないかと思ひます。また隙な時に、じっくりと淨るりを讀んで見たいと云う人もある事でしょう。こんな方々の要求を充す爲に、この度、私共文樂愛好會の同人が相談して文樂座の方々の後援のもとに、文樂叢書を出版することになりました。折角出版するのですから、作者や上演年代についての一通りの解説やら全体の構成については勿論、語り方、時には三味線にも觸れ、その上正しい鑑賞の仕方、記録的な舞台寫眞、舞台裝置図、人形の首や髪 of 解説、人形の動き(型)まで書き入れて、文樂の本質は近松門左エ門の云つた「人形にかゝる」ものであると云う事を忘れず、文學としてだけでなく演劇として味つて頂く場合の參考になるものを書いて見ることにしました。

この第一巻は匆匆の間に作りましたので、欠点も多いと思ひますので皆様の遠慮のない御批判や御註文をお聞かせ下さい。そして少しでも皆さんの力によつてよいものにし皆さんの本として可愛がつて頂きたいと存じます。

目 次

△壺坂寺に就て 大隅太夫の話	2—5
△床 本	6—27
△首の説明	28
△吉田玉造及玉助 の壺坂寺の型	29—36
△舞臺背景圖	37
△刊行書目	38
文樂愛好會編集同人	
齋藤清二	
萩野三治郎	
安原仙三	
吉永孝雄	
三村幸一	
石井常彦	

壺坂寺に就て

大隅太夫の話

此壺坂寺の淨るりは、明治十一年頃或文士の方が壺坂寺の由來記に依つて御書きになつたもので、極ざつとしたものでしたが、それを其頃大坂堂島大江橋北詰西入にあつた人形芝居の小屋に出て居ました、先代の春太夫、小鞆太夫、綱太夫などいふ一廉の太夫達が豐澤團平さんの處へ走つて、手附の相談を致しましたのです。處が團平さんの女房の加古千賀女が作意のある女でしたから、その淨るりに更に文句を附加へてそれを又團平さんが節附を致したのです。だから早くいへば最初粗普請の出來て居る家へ、跡から雜作を入れたやうなものなのです。さて節附が出來た處から、その小屋で興行することになり、この時始めてこの淨るりを語つたのが島太夫で、三味線は新三郎でした。私は其頃文樂座に居り

- (一) 三代竹本大隅太夫、五代目竹本春太夫門、明治五年出座二代目豐澤團平の指導の下竹本越路太夫(後の攝津大塚)と共に明治期の二大名人、明治十七年三代目をつぎ、大正二年六十才で台南で死す
- (二) 善太夫調書では明治八年尙芝居では明治十年と十三年と十六年とに京都で上演して居る
- (三) 福地櫻痴とも伊東橋塘とも云う、宇田川文海ではない
- (四) 五代目春太夫か、六代目は攝津大塚
- (五) 豊竹古鞆太夫か、本格的太夫で古風古格を重んじた人
明治十一年殺さる五十二才
- (六) 六代目竹本綱太夫、三代長門の弟子、竹本織太夫、明治十年大江橋の席で六代目綱太夫襲名、全身刺青の江戸前粹な美音家、明治十六年東京で歿
- (七) 豐澤團平二代廣助門、中

しましたが、その小屋は間もなく潰れ、この淨るりも一時絶えて仕舞い
ました。その後明治二十年(十三)になつて、二月の十日から稻荷の彦六座で團平
の三味線で私が始めて語りましたが、これが大變な評判で、三月の十七
日まで三十五日間興行しました。この時の人形は澤市が辰五郎、お里が
亀松(十四)でした。それにこの時は道具がよく月に叢雲の掛る處などが評判で
した。この前に團平が筋附を致しましたが、自分で弾いたのはこれが初
めてですから、まづこの時がこの淨るりの大成した時と申して好かろう
と存じます。その翌年即ち明治二十一年初めて東京で語りそれから函館
新潟、次に信州から長崎などを持つて廻り、近頃では一昨年堀江の明樂(十五)
座でやつた時にも、非常の大入を致しました。一体壺坂といふ處は大和
の土佐町の先の偏僻な處で、これまで格別の參詣者はなかつたのです
が此淨るりが流行つて、私が諸方を持つて廻つてからは、札幌邊からも參詣に
來る人がある様になつたのですが、丁度この興行中壺坂寺の坊さんが菓
子折を持つて、私共へ參り、この淨るりが行はれてから遠國の參詣者が
引も切らぬ様になつたのは全く貴君のお蔭だと申して居りました。その
頃、中江兆民(十六)さんも、この淨るりを三度までお聞きにお出でになつて、

古の名人三代竹本長門に認め
られ二十八才その相三味線と
なる、後越路太夫、大隅太夫
を弾く、明治三十一年四月稻
荷座で大隅太夫の志渡寺を弾
き乍ら歿す。斯道の神祕。
(八) 加古千賀團平の後妻、文
才あり。

(九) 明治十二年十月大江橋の
席

(一〇) 豊竹島太夫、五代目豊
竹湊太夫の門、猫の鳴き聲の
やうに聞えたので猫島と諷名
悪聲、世話畑。明治十七年歿
(十一) 豊澤新三郎、初代豊澤
新左衛門、藝は大きく明治中
期の三羽鳥の一人、時代唄。

(十二) 明治廿年二月四日

(十三) 吉田辰五郎、三代吉田
才治門、明治初年文楽座出勤
後彦六に入り人形紋下、明治
廿三年歿。

(十四) 桐竹龜松、女形、現文
五郎のよくほめる名人、明治
卅年十月足の上へ墮子が落ち

一年有半で大層褒めて下さいました。それから又東京では吉原で講中が
出来、私も澤市の墓を建てる時寄進に附いたことがありました。その後
明樂が文樂座に合併した時にも、この壺坂を出して七十五日間興行致し
ましたが、この時の澤市は玉造(七)で、お里は玉助(六)でした。それで大阪では
幾度も道具を變へて出しましたがいつも外れたことはありません。又旅
でもこれを出して入らなかつたことはなく、長崎で興行の時には、五日
位前から附込まなくつては場が取れませんでした。私もそれで幾度致し
たが、一寸數を思ひ出しません位ですが、それも團平さんの力のあるお
蔭だと思つて居ります。語り出しの「夢が浮世か、浮世が夢か」は法師
歌で、俗に「まゝ(十九)の皮」と申すのを枕に使つたのです。この歌の起りは
京都の絹屋の妾が魚屋と色事をしたのが露れた時、旦那が非常に怒つて
殺して仕舞はうと思つたが、風流な人だから厠に行かうとする時、不圖
この歌を拵へたので、こんなものを相手にしたつて仕様がないと斷念を
附けて、妾には暇を出してしまつたのです。その後この歌を松原檢校に
見せたら、檢校が手を附けた處から世に行はれたのださうです。この歌
の末の句に「あゝまゝの皮」とある處から「まゝの皮」といへばこの歌

後片足まり、三十一年一月朔
四十一、二才。

(十五) 稻荷座は明治卅一年六
月廢落、明樂座は明治卅一年
十一月堀江町内で旗上げ(文
樂座に對抗)卅六年一月まで
つづく。

(十六) 中江米民名は篤介、高
知出身、政論家、ルソソの民
約譯解、これは自由黨闘士の
指導、理論の役割を果す、義
太夫愛好家。

「今兩、二回大隅太夫、越路太
夫の藝太夫を聴き玉造、敎十
郎の人形を見て以て暇を此娑
婆世界に告ぐるを得んこと至
願也」(一年有半)

既にして大隅太夫其の相模然
たる肥大の体を掲げ來り、や
がて彼の有名なる法師歌、
「夢が浮世か浮世が夢か」を
歌ひ出し奄々絶えんと欲して
絶えず、其の澤市とお里との
断の如き直ちに其の人を現出
したる此間大隅太夫無き也、

と解る様になつて居るのですが、それを澤市の身の上に思ひ寄せて、この歌は歌はせることにしたのです。

それから次に唄ふ「鳥の聲、鐘の音さへ身にしみて」の唄は、これも菊の露といふ法師歌の初の句で、世を果敢むやうな唄なのです。これには北譜と南譜と二通りあつて、北譜の方が品の好いのですが私は南譜の方を取つて居ります。山へ上る途中で歌ふ「憂が情か、情が憂か」といふ歌は、澤市が死にと行く覺悟を示したのですが、こゝへも私が秋草の歌を欲めて見たこともあり、又杳掛村の「御法の山に獨行くらん」といふ歌をはめて見た事もありますが、どうも工合が悪いので矢張舊の歌に致しておきました。尤も小歌には女郎衆の送り出しといふやうなものが多くて、死に行くといふ歌は誠に少いのです。兎に角こんな歌を欲めて、澤市の心の内を映す様に書いた千賀さんと團平さんはえらい者です又「岩を建て水を湛えて」の御詠歌は、六番の御詠歌をそつくり使つたものです。それから「早曉の鐘の聲」を「早深け渡る鐘の聲」と変へましたのは後に「早晨朝の鐘の聲」とあるのと重複しますから、私が變へて語りますのです。終は朝日が出る眼が開くといふので、この上もなく

嗚呼按此に至りて神なり

(一年有半)

(十七) 初代吉田玉造、二代吉田辰五郎門、明治期人形遣の代表者、早替狐遣の名人、明治五年人形紋下、同卅八年一月歿。

(十八) 初代吉田玉助、初代玉造の倅、元治元年より出座、若年より鷹秀、鯉玉遣にまさると云はれる、明治十九年七月歿。この玉助は二代目で初代玉助門、明治九年玉七と改名二十二年二代目玉助、三十九年二代目玉造、四十年三月歿四十二才、初代玉造紋十郎につぐ名手。

(十九) 本文註参照。

(二十) 本文註参照、

この文句のあるものは大抵死ぬ。

目出度いのですから、あすこへ送り萬歳(廿)を使つたので、これも無論千賀さんの工夫です。

それから私が澤市を語るに就ては、種々な盲人に附合つて、熱心にその癖を取る様に致しましたが、取分け故人になつた盲人の住太夫(廿二)は、私を手を曳いてやる様にして、その様子を映しました。一体育人には物をいふ時には、左の方に顔を寄せていふ癖があり、又物を聞く時には耳を寄せて聞き、又少し仰向いて鼻で聞くやうな傾があります。何か物を取つて呉れといふ時も、眼明は直ぐ手を出すのですが、盲人は手を引込めて居ります。こんな風に思わくが違ひますから、私もその心持で語る様にして居ります。

澤市が我家を出る時「細き心も細からぬの」の跡で「エヒ、ゝ、ゝ」と泣きますのは、自分が身を捨てれば、お里は眼明の人の處へ片付くだらうし、長年住んだこの家もこれが別かれと思ふので、名残を惜んで泣く心なので、この節附には私も苦心を致しました。

終に眼が明いた處で、我女房に「初めてお目に掛りました」といふ處も、「のり(廿四)はら」で面白いのですが、これが可笑いといふのは、文を味

(廿二)盲人の四代目竹本住太夫、竹本内匠、三代長門の門初名田喜太夫、萬延元年四代目相續、後彦六座の紋下。二十二年歿盲人だが美聲、明治初期の大立物。カンよく弟子に三度よませると覚えてしまふ。

(廿三)其日庵は「久さしぶりでお目にかゝります」と變へたが不可。

(廿五)見物がわらふのは自分の妻に丁寧に挨拶するのが可笑いので氣にかけることは不要。

つて彼の腹を考へないからです。都て大夫と三味線弾きにしてからが、トンテンと弾く、このテン一つの出工合で、大夫が旨くも拙くも語れるのですから、呼吸の合ふ合はないは大切なものです。それと今好い大夫の無くなつたのは、御客様の方で時代物をお嫌ひになつて、世話物の方を御好みになる處から、太夫の方も世話物が樂なのでその方ばかりに力を入れるやうになり、時代物に骨を折つて聲を擴げやうといふやうな人が少くなつたからでせう。それから淨るりにも流行る流行らないがありまして、私が壺坂同様に語つて居る新淨るりに、都の或大名の奥方が子供を驚に攫はれたのが、或日京都の川船の乗合客の物語で、その驚にさらはれた子供が或尊い僧に救はれ、今は吐月峰の良辨といふ智識になつて居るといふ事を聞き、其寺へ尋ねて行き良辨が看經して居る處へ飛込み、守袋を出して名乗り合ふといふ筋があつて、中々好く出来て居ますが、この方は話の間が長い爲もありませうが、どうも流行りませんでした。流行るといへば、この壺坂の流行はえらいもので、當節では一寸花街へ参りまして、「今頃は半七さん」といふ方は壞れて仕舞ひ、「三つ違ひの兄さん」といふ方を、皆さんがお語りになるやうになつて居ります。(歌舞伎四十號)

(廿六) 南都東大寺良辨杉由來

(廿七) 大阪の櫻宮。

(廿八) 南都東大寺。

(廿九) 二月堂の前の大杉を禮拜してゐる所。

(卅) 艶容女舞衣酒屋のお團のさわり、今頃は半七さん、どこにどうしてござらうぞ……

○彈出し

シヤン、シヤン「ハツ」(地
唄故律聲を出さずそれだけの
間を取る)

テチチンウ、チンウ「ヤー」チ
リンチリツ、ツン、ツルシウ

テツン、「ハツ」テチ、シウ
チリンウテツンウ「ハ」ツト

ン、ロン、ロンロ、トン、

「ヤ」チン「ハ」チテンテン

「ハ」ツトン、「ヤ」シヤン

シヤン「夢が」(地唄)トテ

チン「うき」(義太夫)(世

か「ア」(地唄)「浮世が夢」

(義太夫)「かア、」(地唄)

○夢が浮世か、浮世が夢か夢蝶

里に住みながら人目は戀を思

ひ川、うそも情も唯口さきで

一夜流れの妹瀬の川を其水く

さき心から、よその香りの際

袖口に附てかよはど何のまあ

く、かはいくの鳥の聲にさ

めてくやしさまの川(地唄

まの川)

○夢てふ里一夢と云う里、夢の

ようにはかない人の世にも住

めば住むことも出来る

○よしあしびきの善し悪しと

「足更の」(山の枕詞)とか

ける

×この三味線はツウ、ツウ、ツ

ウ、ツウ、ツウ、ツト、テ、

観音靈驗記

壺坂寺の段

二上リ唄 夢が、[×]浮世か浮世が夢か、[×]夢てふ里に、[×]ナホスフシ 住なが

ら、地 住ば住なる世の中にフシ[×]よしあしびきの大和路や、壺坂

の片辺り土佐町に、澤市という座頭有、生れ付たる正直の、琴

の稽古や三味線の、より細き身代の、薄さけふりの營みに、

妻のお里は健やかに、[×]長地カ、リ夫の手助け賃仕事つゝれさせて

ふ洗濯^{たく}や、糊⁺かいものを打盤の、フシ音も幽のくらしなり、

唄鳥の声、[×]鐘の音、さへ身にしみて、思ひ出す程、涙が先へ落

テ、テ、テ、テと左で餘韻を消し砵の打聲を打つ音を出し音もかすかの暮なりという餘情を漂わす

○「鳥の聲鐘の」(地唄)「音さー」(義太夫)「エ」(地唄)「一思ひ」ツッン「出す」(義太夫)思ひ出すのダスではつきり巫頭の音遣い即ち盲目聲を出す。妹背の川をの「川を」でも盲目聲を出す。同じ盲目でも檢校は時代がかつて位をつけてゆつたり、巫頭は眞世話の間で俗っぽくドス汚くやる。

鳥の聲鐘の音さへ身にしみて思ひ出すほど涙が先へ、落ちて流るゝ妹背の川をとわたる舟の楫だに絶えて甲斐もなき世と恨みてすぐる、思はじな逢ふは別れと雖もぐちに、庭の小菊のその名にめでて、晝は眺めて暮しもなるが夜々毎におくつゆのつゆの命のつれなやにくや今はこの身に秋の風(さきくのつゆ)

○「エ、」お里が聞きとがめて聞いたとす

○下に居やーこゝに坐れ

ちてながるゝ妹背の川を 詞ヲ、是はく澤市様、けふは何と思

ふてやら、三味線出して、よい機嫌じやの、ホ、ハ、ハ、ハ、ヲ

、お里か、そなたアノおれが三味線弾を、よい機嫌に見ゆるか

や、アイナア、ハテナア、おりやそんな氣じやないわいの、

モウくくく、氣が詰つてくく、いつそ死でものけふ、エ、イ

ヤサアノ死んで仕まう程、氣がふさいでならぬわいのふ、イヤ

コレお里、わしやそなたに、チト尋たい事が有ッ、マアマア下

に居やくく、ハテ扱下に居やいのふ、外の事でもないが、いつ

ぞは聞ふくくと思ふて居たが、丁ど幸い、光陰矢の如しとや

ら、月日の立ッはア、早い物な、アソレわがみとおれが、コウ

○「互に心も知つて居るに」ト、(音を消し)「マなせ」チウン(心から寂しく弾く)

○「どこ」をやら「の」や「から濁りかけ」濁る「の」る「で充分濁つた音を弾く、」詞のは「し」テン(お里の合點のゆかぬテン)

×今の午前午後の四時
あとに明けの七つの鐘を聞き
とあるので夜明けの四時をさ
す。

一所に成つてからモウ三年、地稚い時より云なづけ、×互に心も知つて居るにマなせ、其様に隠しやるぞさつぱりと打明て、云てたもと何所やら濁る詞のはし、お里は更に合點行すふしんながらに、詞コレ澤市様、そりやお前何を云、しやんす、嫁入りしてから三年のあいだ、モほんに／＼露程も、隠し立した事はござんせぬが、夫、共に何ぞ又、お氣にいらぬ事有ば、云て聞して下さんせ、サそれが夫婦じやないかいな、ヲ、そふ云やればこつちも云はふ、ヲ、何シ成リ共云しやんせ、ヲ、云はいでか、コリヤお里、マよふ聞よ、われと夫婦になつて丸三年、毎晩七ツ[×]から先寢所へ手をやつても、終に一度も居た事がな

×どうせ、何としてもお前の氣
に入らぬは

×ひどい、薄情な、我儘勝手な

い、ソリヤもふおれは此様な盲、殊たゑらい疱瘡で、モ見る影
もない顔形、どふで我^レの氣に入^ラぬは無理ならねど、外に思
ふ男が有^ラば、さつぱりと打明^ッて、云^ッてくれたら此様^ッに、
何の腹を立^フぞい、尤もわれとおれとは従弟同志、専ら人の噂
にも、アノお里は美しい[〜]と、モ聞度事におれはのふ、よう
諦めて居る程に、恪氣は決してせぬぞや、コレどふぞ明して云
てたもと、立派^地に云へど目にもる、涙呑込盲目^{フシカ、リ}の、心の内ぞ
せつなけれ、聞にお里は身も世もあられず、縋り付^イて、エ、
ソリヤ[×]胴欲な澤市様、いかに穢しい私じや逆、現在お前をふ
り捨て、外に男を持つ様な、そんな女^ヨと思ふてか、ソリヤ

×それは筋が通らぬ、ひどい、無茶です、見當違ひです、そりや聞えませぬ傳兵衛さん、

(近頃河原の達引)

×お里の「サワリ」(正しくはクドキ)はお里の夫を思う一生懸命の貞節の情が溢れるよう、ねばつかず、サラつと語る

×目かい目界、見得る限り、神界、目かいの見えぬ女的身躯、目かにも水にも入れる心ぞ

×よともにも薄塩たれつ、誰が爲に火にも水にも入れる心ぞ(中務家集)

×お里の眞から観音様を有難いと信心している肚の音遣聞き、チチンリン、ハ、チチン

ハ、シヤン、シヤン、シヤン、シヤンと間をとり本當に人知れずそつと抜け出る意味を弾く、「ソーララット」の音遣が大切

×お里の路氣したいやらしい音を一寸表わす

「ア、ル、ヨ、オ、ニイ、

、」はノリ、

「今のお前のヒトア、コトがチンチン」から荒く、「私は腹が、ターツ、ワ、イ、ノト(つめ)オ、、チンチン

×聞へませぬ、エ、聞へませぬはいな、モと、様や、か、様

に別てから、伯父様のお世話になり、お前と一所に育てら

れ、三ツちがひの兄さんと、いふてくらして居る内に、情なや

こな様は、生れも付ぬ疱瘡で、目かいの見へぬ其上に、貧苦

にせまれど何のその、一旦殿御の澤市様、たとへ火の中水の

底、未來迄も夫婦しやと、思ふ斗クコレ申、お前のお目を治さ

んと、此壺坂の観音様へ、明の七ツに鐘を聞、そつと拔出只一

人、山路いとはず三年越、せつなる願ひに御利生のないとはい

か成報ぞや、観音様も聞へぬと、今も今、迎恨んで居た、わ

しの心もしらすして、外に男が有る様に、今のお前の一言が、

オ、チンチン、オ、チ、
、、、と節に流れる

×澤市の政心は情をたゝみ込む
「女房共、〇、何もいはぬ」
一と無の所を語らぬと本當の
情が出ない。

×愚痴ばかりコレヤア、テ、
ンではいけない、グツと息を
詰めていないと腹が弾けない
×ソデヤ、タモトヲ、ヒタスラ
ンと文字を詰めて語り

×「何の詫び〇、私しや死んで
も」と無の間を語り

×こゝも無がある、こゝと次の
イヤモウの音遣に澤市夫婦の
情を語らぬと帯坂が語れたと
は云えぬ

×「が」が大切で澤市の心が觀
音様の方へ向い來る萌芽の一
句

私ははらが立わいのと、くどき立たる貞節の涙の色ぞ誠也。
フシカ、リ

始^地て聞し妻の誠、今更何^シと澤市が、詫の詞も涙聲、ア、コ
詞

レ女房共、×何^シにも云ぬ堪忍したも、誤つた、くくくわ

いのふ、モウそふとはしらす、かたわの癖に愚痴斗り、コレこ
地

らへてたもれと斗にて、手を合したる詫涙、袖や袂をひたすら
フシ

ん、ア、コレ、連添女房に何の詫、お前の疑ひ晴たれば、私し
詞

や死^シでも本望じやわいなく、イヤモウそふ云てたもる
×

程、わがみの手前面目ないわいのふ、が夫程に迄信心したも
×

つても、おれが此目はコレ、マ治りはせぬはいの、エエ、ソリ

ヤマア何を言はしやんすぞいな、此年月のうき艱難、雨の夜、

×まわり氣な根性、まがつた疑
深い性質

「枯れたる木にも花が咲く」
までしつかりと云い、一寸間
を置いて「トヤラ」は極めて
危げに、そろそろ死ぬ心を表
わし初め、「見えぬこの目は

雪の夜霜の夜も、いとはぬ私のはだし参りも、皆お前の爲じや
ぞへ、サア、夫程に祈誓をかけ、願ふてたもつた志、有がたい
共、嬉しい共、其貞節なそなたをば、此年月の廻根性、觀音様
じやといふたとて、罰こそあたれ何のママ、此目が明いてたま
る物か、エエ何のいな、私のからだはコレイナアコレ、お前の
体も同じ事、そんな愚痴を云ふより、ちやつと心を取なをし、
觀音様へ供々に、お頼み申て下さんせ、^地と夫を思ふ貞心
の、心づかひぞ哀なり、澤市涙にくれながら、ヲヲ過分なぞや
女房共、そふそなたが一心の、すはつた上は御佛の、枯れたる木に
も花がさくとやら、見へぬ此目はかれたる木、^{ほく}アアどふぞ花が

「は潰れた目を手で指さす振を語り口にはつきりと表わす盲目を語るには耳を目として扱ふ。」

×「花が咲かしたいいなア（カワツチ）といふた所が（ウレイの間をおき）罪のフカイイ（突込み）此身の上、せめて未來は（十分泣いて）イヤサアノ（てれかくしの詞）女房共手を引いてたも、いざいざと（次第に間を早め、女房は十分勇んで「踊り間」風に運ぶ

×「ホソーラツエノ」の次の合の手は「チ、チン」「ハツ、チ、」「チ、、、」「ヤツ、チーン」「ヤツ、トン」と五つに區切つてその「間」に盲目が杖を探つてこそこそと家を出掛ける足取りを弾く。

細き心もホソーラ（ラにウレイ）ヤ、カーアララア、（ウレイ）ア、×（ウレイ）ウ、、（ウレイ）

「鬻ひは」から澤市のことから離れてハツテ出て次第に雄大に語る
×「辿り行く」の上三重はうんと立派に行く、頓坂の買景に反するが、高野山か、比叡山のような深山幽谷の氣持でやらぬと劇にならぬ

咲きたいな、といふた所が、罪の深い此身の上、せめて未來

を、イヤサアノ女房共、手を引てたもいざいと、いふに嬉し

く女房が、身拵さへそこ／＼に、いたわり渡す細杖の、細き心

もほそからぬ、誓ひはふかき壺坂の御寺を、^{三重}さしてたどり行、

傳へ聞壺坂の觀世音は人皇五十代、桓武天皇奈良の都にましま

す時、御眼病甚しく此壺坂の尊像へ、時の方丈道喜上人一百七

日の御祈禱にて、忽平愈有、せられ今に至つて西國の、六番の

札所とは皆人々の知所、實有がたき靈地なり、折しも坂の下よ

りも詠歌を、道のしをりにて、^{ナラス長地カ、リ}澤市夫婦漸と御

寺間近く詣來て、^詞コレ澤市様、信心は大事なれと、病は氣から

「傳へ聞く」以下、位をもつて、ノツタ常間の早間でさらさらと運ぶ

×住僧道基上人、つぼの中より祈りいだされなければ露坂と云うと又沙門報恩の鬮基で天平勝百四年桓武天皇の眼病を癒すとも傳える

(觀音靈驗記文化十一年)

×枝折、山路で木の枝を折りかけて歸路のしるしにする、しるべ、案内

×心軽く、爽快に、

×さわさわと、さつぱりと

「頼りだ御方は何事もわつさりとして」(狂言三本柱)

×唄いつゝ死ぬ覺悟をきめているといふウレヒの心を表面へ出さず、それを「間」で表わす

こゝは一足づゝ歩きつゝ唄う節付になつてゐる

「うきが清か」(間)無のウレヒの肚を語り、カハツテ、カブセテ、「情がうきか」と續け又間、チンツ、チ、ンツチンツは氣を換え、「露と(間)消えゆく」は充分寂しく次のチチンに特に大切に、澤市の氣持でカブセ、「我が身の」は極めて寂しく、オホツと涙がこぼれこゝまで來て

といふからは、お前の様にしほ／＼と、ふさいで計^レ居やしや

んすと、猶病はおもならふ、コレこんな時にはわつさりと、日

頃覺への歌なりと、氣ばらしに諷^{うた}はんしたらどふじやの、ム、

ほんにそふじやの、わがみの云やる通り、くよく／＼思ふは目の

毒じや、そんならアノさらへと思ふてやつて退ふ、しかし、誰

も見ていやせぬかや、エエ儘よ、憂^唄が情か情が憂か、チンツ

チチンツチンツ露と消行、テチン我身の上は、チンチチ

チリンツテチリツテン トンシヤン 詞アイタ、、、アしも

た、今けつまづいて、跡の合の手みな忘れた、アハ、、、

ホ、、、と、地歌を暫しの道草に、御本堂へと登り來て、

はじめてウレヒを表面に出す
そのてれかくしに全然かわつ
て「ウ、ハ、ハ」からノリは
じめチンチ、チリンツ〜以下
の合の手は蹴つまづくように
十分ノツテ踊り間で唄う

Xこゝはお里であげさすのがよ
いが澤市でやつてもよい、近
頃は上の句だけやる

詞
サア〜澤市様、ソレ観音様へ来たはいな、ハアモウ爰が観音
様か、ヤレ〜有難や〜、ハア、なむあみだ佛〜、
〜、コレ〜こちらの人、今宵こそゆつくりと、御詠歌を夜も
すがら、上ませふではあるまいかと、夫婦して、唱ふる詠歌の
聲すみて、いとしん〜と殊勝なる、岩を建、水をた〜へて壺
坂の、庭のいさごも浄土成らん、コレお里、叶ぬ事とは思へ
共、そなたの詞にしたがふて、來事は來ても中〜に、此目は
治りそふなことはないわいのふ、エ、此人はいのふ、又しても
〜そんな事、コレ此壺坂の観音様、ひかし桓武天皇様、奈良
の都にまします時、眼病にて御惱、夫故に此観音様へ、御立願

本フシカ、リ

X順禮歌

ナホス詞

×かんまへてーかまへて
氣を付けて、心して、決して
どこへも行きなごるな

なされた時、早速御眼が明たけな、夫故お前に勧るも、ハテモ
ウ天子様じやといふた逆、たとへ虫けらの様な我々でも、あた
に隔はないはいな、モ兎角信心といふ物は、氣を長う歩みを運
んで、心を鎮め一心に、お縋り申せば何事も、叶へてやると
のお慈悲じやはいのふ、そんな事をいふ手間で、^地早ふお唱へ
申させふと力を付、れはいかさまのふ、ほんに云やれば其とふ
り、そんならわしは今宵から、三日の間、こゝに斷じきする程
に、そなたは早ふ内へいんで、何角の用事任まうておじや、治
るとも、治らぬ共、此三日の間が運定め、オ、よふいふて下さ
んした、そんなら私も内へ歸り、何角の用事片付て來ませふ、

×「ヲ、どこへ」は澤市の自分の死場所を教えられたところであるから慌て氣味の動搖した肚で語り「行かうぞ」で一寸止まり、無の間を語り、そのれかくれしにカハッテ今夜から觀音様と、ヤ、ク、ビビキ、チヤ、と拍子を十分ツメて云うので次の笑いのとりやりが面白くなる

×とつかは「あたふたと急ぎあわてること、足を飛び交わすことより起る
「心ぞぶろにとつかはと
「いそぐ程方谷」(隅田川)
×かつばと「がはと、どしんと
×ひとえにお里の貞節に調す肚一杯で語る

×「あふべきことのあるべきかア、ハ、ハ、ハ、チオン、ア、ハ、ハ、ア」かの産字は泣き乍ら語り、三味線も一つ一つ音を消してひく

がコレ澤市様、此お山はけはしい山みち、殊に坂を登りて右へ行ば、幾何、丈共知ぬ谷間じや程に、コレかんまへてどつこへも、ヲ、どこへ行ふぞ、今夜から觀音様と、首引じや、アハ、ハ、ハ、ホ、ハ、ハ、ハ、と笑ながらに女房が跡に心は置露の、散てはかなき別れ共しらでとつかは急ぎゆく、跡に澤市只一人、こらへし胸のやるせなくかつばと伏て、泣居たる、詞コレ嬉しいぞや女房共、此年、月の介抱其上に、貧苦にせまるものとひなく、只の一度も愛想つかさず剩へ、目かいの見へぬ此身をば、大事にかけてたもる志、それ共しらす色々の疑立テ、コレ堪忍してたもく、今別てはいつの世に、又あふ事の有べき

×「三歳が間から盲根性を出し
「願ふても」の次にフンと鼻
で嘲笑し、「ナアインの利益
もないものを」と観音様を馬
鹿にした肚です
×十分ウレヒで

○のけば長者が二人（諺）氣の
あわぬ者が一緒に仕事が出
来ぬ、思い切つてはなれると
二人共に立派に成功する
×隔つて行つたお里にいう肚一
杯

×「してたもや、や、や、」の
最初のヤ、は勢のよい高いウ
レヒ次は稍低く、最後のヤで
泣き入る
カハッテ「最前聞けば」は締
めて「谷間」と云う一句は自
分の死場所なのだから十分注
意して息で云う、一寸止つて
「とのこと」は寂しく、「是究
竟の最後所」は突込み、

×絶好の、最もよい死に場所
×「かゝるゝあらん」までヘタ
ッテ「ム、幸に夜は更けたり
一は力を入れ一人なき中に」
をウレヒでしめ、「ヲそふじ
や、はいよく最後の決心を

か、ふ便の者やいぢらしやと、大地にどふと身を打伏前後、ふ
かくに歎きしが、^{やうやう}地漸に顔を上げて歎くまい、^{×詞}三年が間女房
が、信心凝して願ふても、何の利益もない物を、いつまで生て
も詮ない此身、世の諺にもいふ通り、[○]退ば長者が二人のたと
へ、[×]わしが死のがそなたへ返禮、生^{*}ながらへていづれへ成^リ
と、[×]よき縁付をしてたも、や、や、や、ム、[、]最前聞^ッば、ア
ノ坂を登りて右へ行ば、幾何丈共しれぬ谷間との事、[×]是究竟の
最期所、[×]かゝる靈地の土と成ば、未來は助^カる事もあらん、ム
、幸に夜は更けたり、^{タ、キ}人なき中に、ヲ、^地そふじや、くくと立上
り、^{タ、キ}亂るゝ心取直し、[×]上る段さへ四つ五つはや曉の鐘の聲、^舞イ

して立上るのだから十分力を入れて出、「ミイー、ミイー、ダアル」と音を廻し「コ、ロ」で直り「トマリ」エツと猫聲ナ一ホシツをチテンツン、ツンとうけ、「上る」から探り間で運ぶ

「上ル」チン、チン「ダーン」チン、チン「サエ」チ、チヨン、ヨ、ツ、イツツウ」

×更け渡ると語る人あり

「瞬の」の「の」は太夫も三味線もウレヒから中ギンへにじり「カネノコ」は音を遣つて出「エーツ」を強く尻張りに三味線も「トツンツンツン」と手厚く一氣に弾き「エ」で鐘が深山にひびき渡る「イザ最後時急がんとヲ、杖を力に盲目の、サグウ、、、ウ、、、ウ、、、ウ、、、ウ、、、サア、(一寸色氣もつ音)グウ、ウ、、、ウ、、、ウ、、、ウ、、、ヨオヨオ、トコナアアナノ、チ、ン、チ、ン、イヤ〇〇チヨン(と拵えてのり)チ、、、ハ、、、岩に」

「迎ひぞと、ツン、杖を傍に」のツンは澤市が岩の上から谷底をハダと隈んだ「ツン」ですから手厚くキメテ大切に弾く、「身の果は」で飛込ま

ザ最期時いそがんと、^{ナホス}杖を力に盲目のさぐり、^{林漕がより}く〜て漸と、^{やうやら}

ヲクリこなたの、岩にかき上れば、^{コハリ}いと物す凄き谷水の、流れの

音もどう〜と、響くは彌陀の迎ぞと、杖を^{かたえ}傍に突立て、な

むあみだ佛と諸共に、がばと飛込身の果は^{フシカ、リ}哀成ける次第也、

フシカ、リ^カかゝる事共露知、すいさせき道より女房が取て返すも

氣はそごろ、常に馴にし山道もすべり落やら轉ぶやら、漸登る

坂^カの上、詞ヤア コリヤ コレ ちちの人が見へぬわいな、澤

市様、^カいのふ、^地澤市様のふ、と尋廻れど声だにも、人か

けさへも見へざれば、あなたへうろ〜こなたへ走り、^詞澤市様

いのふ、〜とこ、かしこ木の間をもる、月影にすかせば何か

し、「哀れ」チンは十分ウレ
ヒで寂しく弾く

×お里の出は三味線より先にカ
ブせて出る「知らず」で一寸
留まり、ハ、チ、ハ、ハ、と
履け、「氣はそよろ」で押え
「常になれし山道も」から
はお里がころびく坂をのほ
る息を弾く

×「坂の上」チ、ン、チ、ン
間では常間でなくキヨロく
間で

×三度目の「澤市さんのふ」
は全く泣いて語る、「たづね
」は上から出てウレヒに落す
×「こりやマア」からギンウケ
になり、曲風が陽氣になり以
下お里の「クドキ」も全部ギ
ンウケで且つおどり間で行く
但し心は踊らず間でおどる

×しだらは、工合、都合、てい
たらく、有様
(明けくれの顯ひ叶はぬのみ
かこのしだら(生玉心中))

物有と、立寄見れば覺の杖、ハット驚き遙か成、谷を見やれば

照月の、光りに分つ夫の死骸、ハアこりやマアどふせう悲しや

と、狂氣の如く身をもだへ、飛おりんにもつばさなく呼どさけ

べど其かひもこたふる物は山彦の餅、より外なかりける、エエ

こちらの人聞へませぬ、く、くはいな、此年月の艱難も、い

とわぬ私が辛抱はな、只一筋に観音様へ願込て、どふぞ早ふ

眼の明*ます様、お助なされて下されと、祈らぬ間迎もない物

を、けふに限つて此しだら、跡に残つて私しやまあどふ成ぞい

なア、どふせふぞいな、どふせふぞいなくく、アア是を思

へば最後に、諷はしやんしたアノ歌は、どふやら心にかゝつた

ヤミイ、、、ハ、、、イ、、、イ、
ハ、、、ハ○○○○○
掛壁なしで息で間をとる。ヨ
イ、チ、、、ハ、、、ハ、、、イ、ヨ
リ、チンチン、ヤミミ、ノオ
ハ、、、オ、、、ハ、、、シ、
デ、ノ、イヤ、タア、、、ピ
ー

お里を死際に十分踊らせた節
付が實に偉大。

が、今で思へば其時に、死る覚悟で有たのか、エエしらなん
だ、くくわいな、斯云事なら何のママ、お前を無理に連て
來ませふ、堪忍して下さんせ、くくく、地ほんに思へば此身程
はかない物が有かいな、二世と契りし我夫に長いわかれとなる
事は、神ならぬ身の淺ましやかゝる憂目は前の世の、報ひか罪
かエエ情なや、此世も見へぬ盲目のやみより説經闇の死出のたび、
誰が手引を仕てくれふ、迷はしやるのを見る様で、いとしいわ
いのとかきくどき、くどき立く、歎く涙は壺坂の谷間の水や増
るらん、やうやう漸涙の顔を上、アア悔まい歎くまい、詞皆何事も前
の世の、定り事と諦めて、夫と共に死出の旅、いそぐ急はかたみの此

杖を、渡すは此世を去てゆく、行先導き給へや南無阿彌陀佛み
だ佛の、聲諸共に谷間へ、落てはかなき身の最期貞女の程こそ
哀也、頃フシは二月中空や、本フシカ、リ早明近き雲間よりさつと輝く
光明に連て、聞ゆる音楽の音も妙なる其中に、長池いともけ高き上
臈の姿を假に觀世音、微妙みの御聲うるはしく、いかに澤市承は
れ、汝詞前生の業により盲目となつたり、しかも兩人ながら、今
日にせまる命なれ共、妻の貞心又は、日頃念する切徳にて、壽
命を延し與ふべし、此上はいよく信心渴仰して、三十三所を
順禮なし、佛恩報謝なし奉れ、コリヤお里、く、澤市く、
と宣地ふ御聲諸共に、かき消如く失給へば早、晨朝の鐘フシの聲四方

×夢ともわかぬ二人とも、テ、
ンのテ、ンが無意味にならぬ
よう

×ヒエーと一旦おどろいて、
あたりをキョロキョロ見廻す
間において「ホンニこりや目
が開いた」と語る
「目があいた目があいた」は
喜ぶと云うよりむしろウレヒ
で土になき入る形を語り表わ
す

×有難うございます有難うござ
いますになつて最後に泣き入
ります、そしてふつと気がつ
いて「ウム、そしてアノお前
は……」となる

に、ひゞきて明行空、ほのくくらすき谷間には、^地夢共分ぬ二人
共、むつくと起て、詞ヤアこなたは澤市殿、アア、コレこちの
人、お前の眼が明て有がな、^xエエ、アノ、ほんにコリヤ眼が明
て明、ヲヲ眼が明た、くくくくくく、くく、眼が明た、
チエエ観音様のおかげ、有難うござります、くくくくくく
わいのふ、ムム、そしてアノ、お前はマアどなたじゃへ、どな
たとは何ぞいの、コレ私はお前の女房じゃはいな、エエ、アノ
お前がわしの女房かへ、コレハンタリ、始めてお目にかゝりま
す、アア嬉しやく、夫に付てもふしきな事、正しくわしは谷
へ落、死だと思ふて何にも知ぬ其内に、観音様がお出なされ、

×一眼の龜浮木に逢うと云ふ諺
で思ひ設けぬ喜びに云う
世に生れて人と爲るは難し、
猶大海中の盲龜浮木の孔に値
ふ如し（涅槃經）

×水も漏さぬ仲
交情のこまやかな仲
などてかく逢ひがたみともな
りぬらん水漏らさじと契りし
ものを（伊勢物語）

前生の事、細々と御しらせ、サイナア、私もお前のあとを追、
谷へ落たに違はない、が身内に一つも疵付ず、其上お前のお眼
は明、ホ、コリヤマア夢ではないかいな、ムムそんなら今、澤
市くとおつしやつたが、コリヤ觀音様が直々に、お呼生下さ
れましたに違はない、ハ、ハ、ハア有がたや忝なや、是より直
にお禮參りは浮木×の龜、始て拜む日の光りは、年立かへる心地
ぞや、是ぞ誠に觀音二上りの、御利生有けるや、見へぬ眼も見へ明ら
かに、有がたかりける新玉の、年立歸る如くにて、水×も洩さぬ
夫婦の命も助かりけるは、誠に目出たふさふらいける。けふは
嬉しや杖を納て折しも朝の、日の目を拜で、お禮申や神や佛、

(主として薄池幸武氏の道八
醫談による)

萬見せ給ふは是偏に觀世音、是偏に觀音の、誓の重きは岩を
建、水をたゝへて壺坂の庭のいさごも浄土成らん御しめし有
難、かりける三重御法也。

むすめ	老け女形	源太の稍老 けたカシラ	カシラ
観世音	女房お里	座頭澤市	役名
御寺	〃 〃	澤市内、御寺	場名
唐毛のすつ ぼり、冠、 瓔珞付	油付、勝山	坊主	鬘
描き眉	青眉	描き眉	眉
白	白	薄卵	塗カシラ 色

吉田玉造、玉助の型

最初口上觸が済んで幕が明くと、二の手（奥の手摺）前に淺黃幕を垂れ、下手に畫寶を立掛け、本手（前の手摺）は張物で見切つてある。乱て大和壺坂寺附近水茶屋の体で、こゝは竹本隅齋太夫の淨るり、鶴澤禮太郎の三味線だ。先づ上下から仕出しが二人出て突當り、そこへ下手から茶店の傭が出て白渡る處へ、上手から澤市女房お里が美しい世話女房の人形、漬し島田に淺黄の新裏をかけ、淺黄の襦袢の襟、黒襦子の襟の掛つた紺無地の肩入ある舊い鼠小紋の着附黒無地の引かけ帯、茶地に紺の格子縞のある前垂、帯の右寄の下に白地の手拭を挿んで出て来て、一寸後を振返つて拜むのは、今齋坂寺に參詣した奥り道の心なのだ。すると前の仕出しはお里と知る人の心で會釋し、一人は上手、一人は下手になりお里を真中において、澤市の様な盲人にお前の様な美しい女房があつたらものだといふやうなことを饒舌ると、お里は右の手で手拭を持ち一寸涙を拭くことがある。それで仕出しは下手へ入ると、お里も我家へ歸る心で下手へ入るが、こゝまでの人形は皆黒衣だ。そこで木が入り淺黃幕を切つて落すと、今度は一面の世話茶台、下手に山の張物

を見せ、例の處の入口は開放して、上り口の庭先に砧の台と砧が据ゑてある。入口の奥は板羽目、續いて正面は鼠壁、暖簾口佛壇「けんどん」の下の押入といふ順で、佛壇には、六字の名號を書いた掛物が掛つて居る。その上手の附屋体は正面に障子を閉め、二の手の上には針箱と仕立物などおいてある。都て座頭澤市内の体で、竹本大隅太夫の淨るりに、鶴澤叶の三味線だ。「夢か浮世か浮世が夢か」のチョボで、暖簾口から吉田玉助のお里が、前の癖で白地の手拭を姉さん冠りにして襷を掛け簾の中形の「のりかへ」（洗濯着物）を抱へて出て、「夢てふ里に住みながら」の内、庭に出て、冠つた手拭を取つて、砧の台の腰をはたき、その手拭を帯の右寄の下に挿み「のりかへ」を砧の台の上に置き、砧で敲いて居る。「よし蘆曳の大和路や壺坂の片邊」の内、上手正面の障子を澤市が明ける心で引いて取ると、吉田玉造の座頭澤市は、醜い坊主臺の人形、褐色の石持、瓦色の帯で、首を垂れ、腕を組み、胡座を掻いて居るが、思案に暮れる体で、右の手枕でゴロリと横になり「土佐町に澤市といふ座頭あり」の内、又起上り、頬杖を突いて座り、「生れ付たる正直の、琴の種古や三味線の」の内、三味線を取り出し「糸より細き身代の薄き烟の巻みに」の内、調子を合せ、撥へ鼻の油を附ける。「妻のお里は健かに、夫の手助け賃仕事、つゞれさせてふ洗濯や、糊かへ物を打盤の、音も幽のくらしな

り」の内、お里は砧を打ちやめて内へ上り、「のりかへ」を暖簾口に入れ、前へ出て仕立物に掛り、縫つて、綴針をして、齒で切り、留針をする。「鳥の聲鐘の音さへ身に染みて、思ひ出す程涙が先へ、落ちて流るる妹背の川に」では、澤市はこの唄を唄ふ心で三味線を弾き、「涙が」の件、「落ちて」の件などは首を左に傾けて涙の溢れる心を見せる。お里は、「妹背川の件で、唄の方に心付き、澤市を慰める心で仕立物を傳しながら上手を見て、「オ、是は是は澤市さん、けふは何と思ふてやら、三味線出して、好い機嫌ぢやのホ、ホ、」の詞になる。澤市は、「オ、お里か」で三味線を下に置き、「そなた、あの、おれが三味線引くを好い機嫌に見ゆるかや」で下手を見込む。お里の「あいなア」に對し、澤市は「おりやそんな氣ぢやないわいなう」で右の手を振り、「もうもうもう氣が詰まつて詰まつて」で胸を打ち、「いつそ死んでものけう」で前へ乗出し、お里の「エ、」に對し、「いやさあの」で氣を變へ、「死んで仕舞ふ程」で頭を摩り、「氣が靜いでならぬわいなう」といひ「いやこれお里」で下手を向きて左の手を柱にかけて、「わしやそなたに、ちと尋ねたい事がある」といひ、お里が仕立物と針箱を片付け、上手へ來ると、「まあまあまあ下に居や下に居や」といひお里が傍へ寄る内、自分も真中の家体の上手へ出てはたて扱まあ、下に居やいなう」で、お里を引き据ゑて又離れ

「外の事でもないが」で頭を下げ、「いつぞは聞かう聞かうと思ふて居たが、丁度幸ひ」で前向になつて、筆を疊合せ、「光陰矢の如しとやら月日の立つのは早い物なア」でお里の傍に寄り、「かう」で両手の人差指を並べ、「一所になつてから、もう三年」で右の人差指で左の手を指して、左の手は親指から人差指と數へ、「雅い時より言號、互に心も知つて居るに」で胸を打ち「なぜその標に隨しやるぞ」で体を屈めて寄りながら右の手を振り、「さつぱりと打明けて、云ふてたも」でその手で拜み、「と、どこやら濁る詞の端」で、又摺寄つて体を屈め、両手の指先を軽く打ち合す。「お里は更に合點行かず、不審ながらに」でお里は不審らしく右の膝を進め「そりやお前、何を云はしやんす、嫁入してから三年の間、もほんにほんに露程も隠し立した事はござんせぬ」で下から澤市の顔を見上げ、「がそれ共に何ぞ又、お氣に入らぬ事あらば、いふて聞かして下さんせ、さ、夫が夫婦ぢやないかいな」で、右の手で疊を叩く形をする。澤市が「ム、さういやれば、こつちも云はう」といひ、お里が「オ、何なりとも云はしやんせ」に對して「オ、云はいでか」で乗出し、「我と夫婦になつて丸三年、每晚七つから先腰處へ手をやつても、終に一度も居た事がない」で体を屈めて両手を交る出して床を探る形をみると、お里は驚いて下手向になり、右の手を懷へ入れちつと考へる。澤市は「そりやも

う、巳は此様な旨」で右の手で眼をこすり、「殊にえらい癒癒で、見る影もない顔形」で顔を指し、「どうで私の氣に入らぬは無理ならねど」で右の手を懐に挿入れ、「外に思ふ男があらば、さつぱりと打明けて」で右の手を出し、「いふてくれたら此様に、なんの腹を立たうぞい」でその手で眼をこする。「尤も我と己とは従弟同士」でお里と自分を指し、「専ら人の噂にも、あのお里は美しいとも聞く度毎に巳はもう」で身を顛はして体を揺め、「よう諦めて居る程に、格氣は決してせぬぞや」で首と手を振り、「これどうぞ明して云ふてたも」で右の手で拜み、「と立派に云へど目にも涙呑込む旨目の」で一吋兩手をお里に掛け、又ちやつと飛退いて、「心の内ぞせつなけれ」で上手を向いて兩膝を立て、その上に兩手を重ね「ええええ、ええええ」の泣落し筋になつて、首をふるはして泣きながら揺め、重ねた手の上へ目を附けて泣く。が、こゝまでの澤市は心に隔てがあるから、可成お里の方を見ぬ様にして外方を向いて白をいつて居るのが、人形の腹ださうだ。「聞くにお里は身も世もあられず、緋り附いて」でお里は澤市に緋り「エ、そりや馴染な澤市さん、いかに賤しい私ぢや迎、現在お前を振捨て、外に男を持つ様な、そんな女子と思ふてか、そりや聞えませぬせぬ、エ、聞へませぬわいなあ」で右の袖を顔に當て、泣伏し、「も、ととさんや、かゝさんに別れてから」で

下手へ来て、「伯父さんのお世話になりお前と一所に育てられ三つ違の兄さんと」で右の指で敷へ、「云ふて暮して居る内に情なやござんは」で又上手へ寄り、「生れも附かぬ癒癒で、目かいの見えぬ其上に、貧苦にせまれどなんのその」で兩袖を交る交る寄せて自分の姿を詠め、「一日殿御の澤市さん」で澤市を見上げ、「たとへ火の中水の底なべ」で離れ、兩手の人差指を交る々々出して火の中と水の底の心持を分け「未來までも夫婦ぢやと」で傍へ寄り「思ふばかりか」で膝に緋り「これ申し」で顔を見上げ「お前のお目を直さんと」で下手へ来て「この壱坂の觀音標へ」で右の手を出して觀音標の方へ見當を付け、「明の七つの鐘を聞き」で空を見て、「そつと」で上手向になり、「拔出で只一人」で「チウテン」(兩手を突出して筆を上りに反す形)をして、忍び出る振を見せ、「山路歌はず三年越」で、右の手で山を教へて(山の形を二度轟く)澤市の方に寄り「切なる願に御利生の」で、その手で拜み、「ないとはいかなる報ぞ」で手拭を持ちて咬へ、身をねぢて泣き落す。「觀音標も聞えぬと、今の今まで恨んで居たら」で上手を向き、手を膝に突き、「私の心も知らずして」で傍に寄り、「外に男が」で上手から裏を見て、「あるやうに」の間に手拭で二度澤市の肩を軽く打ち、「今のお前の一言が、私は腹がたつたわいな」で澤市の膝に手を掛けて泣伏し「おとおお、おとおお」と盛

込む節に合せて足拍手をさせながら下手へ来て、「口説き立てたる貞節の涙の色ぞ誠なり」で座つて左の足を立膝にし、顔を下手向に仰向け、両手で手拭を扱く襟に持つて眼に當て、その手拭をその儘下して口に啣へて泣く。「始めて聞きし妻の誠、今更何と澤市が」で体を乗出し、「詫の詞も涙聲」で左の片膝を立て、「あゝこれ女房共、何にも云はぬ堪忍してたも」で右の手を出して拜み、「誤つた誤つた誤つたわいのう」で右の袖を下から顔に當て、泣伏し、「もう、さうとは知らず不具の癖に愚痴ばかり、これ堪へてたもれとばかりにて」で、お里を探る心へ拜み、「手を合したる説涙」でお里の肩に手を掛け、「袖や袂をひたすらん」で後へ下り手を合せるが、こゝで澤市の着附の肩が自然に下り、黒襟の掛つた桃色の襦袢がほの見える。

お里は「あゝこれ、連添ふ女房に何の説」で澤市の傍へ寄つて合せた手を引分け、「お前の疑晴れたれば、私しや死んでも本望ぢやわいなあなあ」で右の手で澤市の手を押し、左で脊を摩る、澤市は「さういふてたもる程我身の手前、面目ないわいのう」で顔を兩袖で隠し、「が、それ程に信心してたもつても、已が此眼は」で右の手で眼をこすり「これま、直りはせぬわいのう」でその手を横に振る。お里は「エ、そりやまあ何を云はしやんぞいな、此年月の憂難、雨の夜雪の夜霜の夜も」で上と下を見て、「厭はぬ私が洗足降りも、みんなお前の爲ぢ

やぞへ」で澤市の膝を叩く。澤市は「さあ夫程に祈鬻を掛け、願ふてたもつた志、有難い共鳴しい共」で、右で胸を押しへる。

お里は「えい何のいのう、私の体はこれいなあこれ、お前の体も同じ事、そんな愚痴を云はうより、ちやつと心を取直し、觀音様へ俱々に、お頼み申して下さんせ下さんせ」で澤市の脊を撫り、「と、夫を思ふ貞心の、心使ぞ哀れなり」で左の手を夫の肩へかけると、澤市は腕組をして考へ込み、お里も下手を向いて右の袖を顔に當て俯向く。「澤市涙に暮れながら」の次「オ、過分なぞや」で右の手を揚げ、「女房共」でその手を膝に突き、「さうそなたが一心の、据つた上は御佛の」で右の肩を落して手を出し、「枯れたる木にも花が咲くとやら」で、右の手で左の手を摩り、「見えぬ此目は枯れたる木」で眼をこすり、「あゝどうぞ花が咲かしたいなあ」で両手を膝に突き「と云ふた處が、罪の深い」で右の手を左へかけ「此身の上、せめて未來を」で乗出し、お里の「エ、」で氣を變へ、「いやさあの」で上手を向いて顔を掻き、「女房共、手を引いてたも、いざいざ」と襟を掻き合はす。「いふに嬉しく女房が、身拵さへそこそこに」で夫の着物の前を直してやり、「痛はり渡すはそづえの」で前垂を外し帯を締直す。「細き心も」で澤市は片膝を立て、その上に手をおき、一寸考へて立上り「細からぬ」で体を反し、兩足で探りながら戸口まで来て、左の手に握りの

附いた杖を受取りながら右の手を柱にかけ、内を見込んで「エヒ、ヒ、ヒ」と泣くのは我家に別れを惜む心なのだ。「響は深き」で本手摺へ出ると、お里が雨戸を締める。「頼坂の、御寺を」で澤市は考へながら二足三足歩いて驟く。お里が助け起すと、澤市は杖を突立て、お里はその杖を押へ、夫を見上げて頷くと澤市も頷き、「さしてええええ」の三重で、お里は澤市の萎れるのを見て、自分も萎れ乍ら先に立ち、左の手を澤市の差出す杖の先にかけ、右の手の手拭を口で啣へながら右手に入ると木が入り、澤市内の道具を上手へ引き、頼坂寺の道具に變る。舞台は一面に山又山の書割で、その間に木立の頭を見せ、本手摺も山の張物に變る。上手寄に籠堂、その前通に石段がある。床で「たどり行く、傳へ聞く頼坂の觀世音は」から「實に有難き靈地なり」までを語る。次の「折しも阪の下よりも詠歌を道の葉にて」で、下手からお里が先に立ち、左の手を帯に當て、右の手で手拭を引張つて出て來ると、跡から澤市が首を左に傾げ、衣紋が崩れた心で、胸を擴げる氣味にして右の手で杖を斜に持ち左の手で手拭を持ち乍ら出て「澤市夫婦やうやうと、此寺間近く詣で來て」の内本手摺の下手寄へ來て、お里の「これ澤市さん、信心は大事なれど、病は氣からといふからは、お前の様に萎々と、塞いで計り居やしやんすと猶病はおもならう」といふ内澤市は躡み、お里は右の手を澤市の脊に掛ける、お里

が「これこんな時にはわつさりと、日頃覺えの歌なりと、氣晴しに謡はんしたらどうぢやの」といふので澤市が「ほんに、さうぢやのう」で頭を下げ、「我身の云やる通、くよくよ思ふは眼の毒ぢや、そんならあゝの淺へと思ふてやつてのけう」で又首を下げ「併し誰も見て居やせぬかや」でお里の方を向き、「エ、まゝよ、憂が情か」で首を曲げ、「情が憂か」で立上り「チンツンツン、チ、ンツチンツン」で杖で合の手を拾ひながら拍子を取り、「露と」で杖を突立て、見上げ、「消え行く、テチン」で合の手を拾ふが、澤市は此文句を自分の身の上に比べて一寸聲を締めるので、お里も何となく氣掛りな心で泣く「我身の上は、チンチチチンツ、テチリツツン」で足拍子をさせ「トンシヤン」の止りで岩角に驟くと、お里が驚いて抱き起す澤市は「あいたゝゝゝあしもうた、今けつまづいて跡の合の手皆辱れた、アハ、ハ、ハ」と笑ひ、お里も「オホ、ハ、ハ」と口到手拭を當て、笑ふ。「と歌を暫しの道草に」で澤市は杖で山の高低を探り、「御本堂へと登り來て」の内、お里は澤市の手を引いて眞中の山道から堂の前へ出て、「さあさあ澤市さん、それ觀音様へ來たわいな」といふと、澤市が、「はあもうこゝが觀音様か」で杖を伸ばして探り、「やれやれ有難や有難や」で杖をおいて稍上手向に墜り、「はあゝ南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」と合掌して拜む

と、その下手に妻も座つて拜む。こゝも本来は堂の中へ入るのだが、今度は道具が間に合はぬので入らぬことにしたのださうだ。お里の「これこれこちの人、今宵こそゆつくりと、御詠歌を夜もすがら、上げませうではあるまいか」の詞があつて「と夫婦して、唱ふる詠歌の聲澄みて、いとしんと殊勝なる」で、澤市は眞後向になり、「岩を建て、水を湛えて壘坂の庭の砂も淨土なるらん」の御詠歌の内、この歌の切目に三度兩手を高く揚げて拜む。「これお里」で左から後を振向き「叶はぬ事とは思へ共、そなたの詞に隨うて」で眞向になり、「來事は來ても中々に」で兩手をこすり、「此眼は治りさうなことはないわいのう」で頭を下げる。お里は「エ、此人わいのう、又しても又してもそんな事……そんな事云ふ手間で、早うお唱へ申しませう」といふ。「力を附ければ、いか様のう」の次に澤市が、「ほんに云やれば其通り、そんなら私は今宵から、三日の間こゝに居て」で左で御堂を指し「斷食する程に、そなたは早う内へいんで何角の用事仕舞ふておぢや、治る共治らぬ共」で眼をこすり、「この三日の間が運定め」といふ。お里は「オ、よう云ふて下さりました、そんなら私も内へ歸り、何かの用事片付けて來ませう」で澤市の上手へ来て、「が、これ澤市さん、此お山は険しい山道、殊に坂を登りて右へ行けば、幾何丈とも知れぬ谷間ぢや程に、これかんまへてどっこへも」の内右の手

を澤市の肩に掛け、左で谷間を指す。澤市は、「オ、何處へ行かうぞ、今夜から、觀音様と首引ぢや、アハ、、、」で右の手を出し、口に當て、笑ふ、お里も「オホ、、、」で口を押へ、「と笑ひながらに女房が、跡に心は置く露の」で前へ下り、右で袂を取り乍ら下手へ来て騒ぎ、「散りてはかなき別れ共」で鼻緒を踏切つた心で、赤い鼻緒の附いた草履を右の手で取上げ「知らでとつかは急ぎ行く」で見返り乍ら下手へ引込む。「跡に澤市只一人、こらへし胸のやるせなく、かつばと伏して泣き居たる」で澤市は岩に縋り、右の袖を口に當て、上手向に泣き「これ嬉しいぞや女房共」で眞向になつて頭を下げ、「目かいの見えぬ此身をば」で右の手で左を打ち、「大事にかけてたもる志」で辭儀をし「それ共知らず色々の疑ひ立、これ堪忍してたも堪忍してたも」で兩手を合せ、「今別れてはいつの世に」で右の手を出して上手を向き、「又逢ふ事のあるべきか」で腰を落し、「不便の者やいちらしや」で下を見込んで首を顛はし「大地にどうと身を打伏し」で岩から滑り落ちかけ、「前後不覺に歎きしが」で顔へ袖を當てたまゝ岩の上で泣伏し「漸くに顔を上げ」で顔を上げ「あゝ嘆くまいく」で首を振り、「三年の間女房が、信心凝して願ふても、なアんの利益もないものを」で左の手を出し「いつまで生きても詮ない此身」で兩手を出し「世の謔にもいふ通」で右を左へかけ「退けば長者が二人

醫、私が死ぬのはそなたへ返禮」で我家の方を向く心で下手を見込み、「生き存命へていづれへなりと、好き縁附をしてたもや」で右の手を高く上げ、「やあやあやあ」で力なく両手を出し「ウフ、、、」で口を押へた儘上手を向いて泣き「ム、最前聞けば、あの阪を登りて右へ行けば幾何丈とも知れぬ谷間との事」で右を左へかけ、「是究竟の最期所」で帶を締直し、「オ、さうぢやさうぢやと立上り」で、杖を取り上げて立上り、「亂るゝ心を取直し」で一丈杖を左の肩にあて、それを右に取立して、探りながら歩き出すと、觀音堂の道具を下手に引き、石段が真中へ來ると、「上る段さへ、四つ五つ」で右の手を段の縁へかけて段を上り、「はや更渡る（本文は「曉の」）鐘の聲」で本釣が入り、漸く正面の岩の上で立上る。「いざ最期時急がんと、杖を力に盲目の、探り探りてやうやうと」の内、正面の岩端から兩足を交るがわる落して探り、次に杖を横に持つて手探りをし、一寸頷いて岩端に立て、「こなたの岩に搔上れば」で追ひながら上手の岩端まで行き、「いと物凄き谷水の」で水の音を打込み、「流れの音もどうどうと」で崖から覗いて水音を聞定める料があつて、「響くも彌陀の迎ひぞと」で合掌して泣き、「南無阿彌陀佛と諸共に、がぼと飛込む身の果は、哀れなりける次第なり」で逆標に谷へ飛込むと同時に水の音強く打込む。そこで道具を上手へ引いて、舊の觀音堂の場に戻し

「かゝる事とも露知らず、いきせき道より女房が、取つて返すも氣はそどろ」で下手からお里が出て左から後を振り返り「やうやう登る坂の上」で堂の扉を明けて夫の見えぬのに驚き、「澤市さんのう」で兩手を胸の前へ當て、慌てた心で其處等を尋ね、「人影さへも見えざれば」で足拍子をさせながら廻る内、道具を下手に引いて石段が真中に来ると「あなたへうろろうろ、こなたへ走り」で右の手で褌を取りながら段を上り、又「澤市さんのう／＼」と呼び、「木の間に漏るゝ月影に」で初の上手から、後に下手から杖を透かして見て、「立寄り見れば覺えの杖」で杖を抜くと上手前通に高く月が出る「はつと驚き」で杖を下におき、「澄なる谷を見やれば照月の」で左の手で岩端の松の木につかまり、右の手を月に翳して谷を見下し、「光りに分つ夫の死骸」で驚いて腰を下し、「ハアこりやまあどうしやう悲しやと」で体を崖から乗り出して、兩手を向ふへ伸し「狂氣の如く身を悶え」から「餅もちの外はなかりけり」まで一杯に泣倒れる。「エ、こちの人聞えませぬ聞えませぬ聞えませぬわいなア」で立上り、松へ兩手を掛けて体を振りながら泣き、「どうせうぞいなアどうせうぞいなア」で松から離れ、真中の岩角に來て泣伏し、「今で思へば其時に、死ぬる覺悟であつたるか」で又松に寄り添ひ、「堪忍して下さんせ」で兩手を合せて泣き、「ほんに思へば此身程」で左の肌を脱いで、淺黄と赤

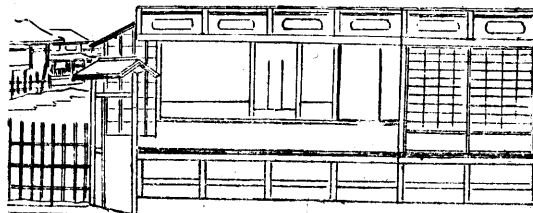
と切繼の襦袢を見せ、「二世と契りし」で向ふを三度に指し「かゝる變目は先きの世の報ひか罪か」で兩手を胸へ當て、それを離して前へ伸す様な形をして「エ、情なや」で右の袖を顔に當て、泣落し、「此世も見えぬ盲目の」で上手に行き、眞向になつて顔に袖を當て、泣き、「暗より闇の死出の脈」で前に行掛け、横に倒れて右の手を下に突き、次に左の膝を突いた上に兩手を掛け、それを力にして立上り、又松に縋つて、「いとしいわいの」で延上り、又泣落節で後へ戻つて廻り、「谷間の水や増さるらん」で松に寄添うて泣伏す。「ア、悔むまい悔むまい皆何事も」で腹背の心で手拭を締め、「夫と共に死出の脈」で右の手を力なく垂らして、体を崖から乗出し、「急ぐは筐の此杖を」で後へ戻つて杖を櫂の左の脇に挿し、「行く先導き玉へや」で後向になつて合掌して拜み、「聲諸共に」で崖から体を乗出し、「貞女の程こそ」で立つたまゝ、体をすくめて飛込むと水の音を打込み、「哀なり」で木が入り道具が上から降りて來て谷間になるが、この舞台は奥深く取つた谷間の模様で、杉の立木、水の流れなどをあしらつてある。「頃は二月中空や」から「いとも氣高き上臈の」で大ドロドロになり、青照を焚くこと、上手の岩が欄の着附、緋金欄へ淺黄と紫の縁ある庭掛の附いた唐裝束で立現れ、妻の貞心と信心の功德にて壽命を延ばすといふ旨があつて、又田樂で消えると、「早晨朝の鐘の聲」で大ドロドロを打込む。「空ほのぐらき谷間には」で又ドロドロを打込むと同時に、二の手の岩壁に伏して居た兩人が、心附いて起上り、本手に出て四邊を見廻す。お里の「こちの人、お前の眼が明いであるがな」で澤市は「ほんにこりや眼が明いである」で我兩袖を交る交る見て、「オ、眼が明いた〜」で兩手

を上げたり眼をこすつたりし「有難うござります有難うござります」で手を合せて泣くと、妻も胸を撫下し、同じく合掌する。澤市は「そしてまあ、お前はどなたぢや」と右で指して尋ね、女房と聞いて「エ、一と驚き、「これはしたり、初めてお目に掛りました」で兩手を大きく掲げて辭儀をする。この内お里は前の筋を語り「身内一つも擬附かず」で兩手を交る交る二の腕を摩る。澤市は「ハ、ア有難や忝なや」で奥を向いて拜み「初めて拜む日の光」で兩腕を脱いで桃色の襦袢になり「年立地返る心ぞや」で眞向に立ち、兩手で杖を横に持つて拜み、「是ぞ誠に觀音の、御利生ありけるや、見えぬ眼も見え明に」の内、杖を右の脇に挿みながら上手へ來て、上手向になつて杖を持つて拜み「有難かりける新玉の年立ちかへる如くと」の内、眞中へ來て後向になつて杖を持つて拜み、「水も洩さぬ夫婦の命も」で、又下手へ來て下手向になつて拜み、「助かりけるは、誠に目出たう候ひける」で杖を膝に當て、それに兩手を掛けて踊りながら廻り、「けふは臆しや杖を納めて」で杖を左の肩に擔いで上手に行きかけ、「折しも朝の日の目を拜んで」で女房と顔見合せて喜び、「お禮申すは神や佛、よろづ見せ玉ふはこれ」で二人共座つて、奥を向いて拜むが、こゝも形の上から云へば扇を持ちたいのだが、年來世話になつた大事なものだといふ心で、杖を持つて踊ることにしたのださうだ。「これ偏に觀世音」から段切まで、澤市は右に杖をかついで先に立ち後からお里は右で袂を取りながら、お里は右に手へ入ると、舞台の下手の奥では朝日の心で赤テルを焚くといふ見得で幕になる（歌舞伎四〇號明治卅六年八月三木竹二……因にこれは初代玉造と玉助の人形の型として殘っている唯一のものです）

舞台装置

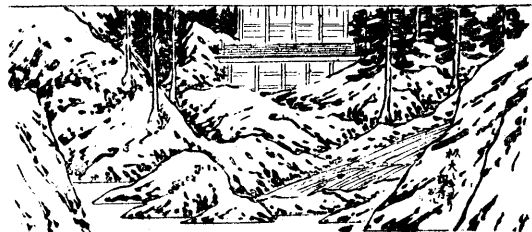
この舞台装置は明治三十六年五月三代目竹本大隅太夫御靈文樂座出座のときの道具帳より復寫

澤市内
「夢か浮世か
……………」より
壺坂の御寺
をさしてたどり
行くまで



壺坂寺の一
「傳え聞く……………」より
後の合の手みな厭れた
アハ……………まで

壺坂寺の二
「歌を暫しの道草に……………」
はかなき身の最期貞女の
程こそ哀れなり、まで



壺坂寺の三
「頃は二月中ぞらや
……………」より
段切まで

壺坂觀音靈驗記メモ

第一期 刊行

第二期 刊行

櫻飛脚大和往來	碁太平記白石駒	戀女房染分手綱	御所櫻堀川夜討	傾城阿波の鳴戸	加賀見山舊錦繪	桂川連理柵	〃	仮名手本忠臣藏	繪本太功記	伊勢音頭戀腰劍	伊賀越道中雙六	妹背山婦女庭訓	一谷嫩軍記	奥州安達原
新口村	揚屋	重の井子別れ	辨慶土使	十郎兵衛内	長局	帶屋	山科	勘平切腹	尼ヶ崎	油屋	沼津	妹山、背山	陣屋	袖萩蔡文
義經千本櫻	名筆吃又平	伽羅先代萩	本朝廿四孝	双蝶々曲輪日記	ひらかな盛衰記	艶容女舞衣	三十三所花の山	近頃河原の達引	福州合邦辻	菅原傳授手習鑑	生寫朝顔話	新版歌祭文	〃	心中天網島
壽し屋	將監閑居	御殿	十種香	引窓	逆櫓	酒屋	澤市内	堀川猿廻し	合邦住家	寺子屋	宿屋	野崎村	紙屋内	河庄
卅三間堂棟由來	櫻鏝恨較鞘	壽連理の松	戀娘昔八丈	國姓爺合戦	曲輪焔	源平布引瀧	義士銘々傳	鎌倉三代記	紙子仕立兩筋鑑	仮名手本忠臣藏	伊賀越道中雙六	妹背山婦女庭訓	近江源氏先陣館	蘆屋道滿大内鑑
平太郎住家	鱧谷	湊町	白木屋	甘輝館	吉田屋	九郎助住家	彌作鎌腹	三浦之助別れ	大文字屋	扇ヶ谷	岡崎	金殿	盛綱陣屋	葛の葉子別れ
良辨杉由來	菅原傳授手習鑑	冥途の飛脚	孃景清八島日記	双蝶々曲輪日記	日吉丸稚櫻	彦山權現誓助劍	鷗山古跡松	八陣守護城	箱根靈驗覽仇討	花上野鬻碑	夏祭浪花鑑	太平記忠臣講釋	王澤前藏袂	壇浦兜軍記
二月堂	道明寺	封印切	日向島	橋本	小牧山城中	六助住家	雪黃	正清本城	阿彌陀寺	志渡寺	長町裏	喜内住家	道春館	阿古屋琴責

昭和二十六年九月十五日印刷
昭和二十六年九月二十日發行

文樂叢書 第二編
帶坂觀音靈驗記
定價 五十円

編 集 文 樂 愛 好 會

大阪市東區高麗橋五丁目

印刷者 株式會社 萬 年 社

發行人 石 井 常 彦

大阪市四ッ橋文樂座內

發行所 文 樂 愛 好 會

電 南 (75) 二〇八二・二〇九二番
振替口座大阪二一五二六二番

酒は
新世界

日本酒類株式会社

焼酎は
ダイヤ

北海道は

日本のスコットランドです



ノスタルジアを

感じさせる

この風味！

ますますうまい季節です

ニッカウヰスキー

北海道
東京 ニッカ 製品 大阪